



續猿蓑
上

中村俊定文庫
文庫 18
136
1





續猿蓑集卷之上

ハレハルルハツテハヨシクハナ

喜ハルルハツテハヨシクハナ

此ハヨシクハツテハヨシクハナ

此ハヨシクハツテハヨシクハナ

此ハヨシクハツテハヨシクハナ

此ハヨシクハツテハヨシクハナ

芭蕉

沾圃

馬寛

里圃

沾

蕉



淡柿もも〜をゆに喰れり
 孫、跡とら 祖父より借得
 服指に點てあけら 孫 刀
 煉ふ志あしをとも 孫の足
 孫米の中を〜とけ 賣にまて
 十里をうらひ 余所〜あしと
 母の志ぶに少海埋てあしと
 あしと〜し〜の書つ新

蕉 佐 里 覓 浜 蕉 覓 里

前々、梅を海流にまき 櫻梅と
 やつや、夢あけら 夢のなつれ
 あしとよあしと〜花の〜あひて
 ともしたる〜ふ 物のなつ口
 夢あしとあしと〜花の〜あひて
 伊勢の下向に海つ〜あしと
 也孫よ小筆に伸りそ〜あしと
 へ〜あしと〜あしと

蕉 佐 里 覓 浜 蕉 覓 里

後集
 二

禪寺に一月あそぶ砂の上
 榎のう角りもてぬき丸
 後かしの半に傳ふもや
 ちれぬ娘もさうさ内記
 月待の侍もさのころさるひ
 離のう菊もさるさるし
 中れて来てぬきもさるのきり
 傳傳もさるさるさる

里 寛 蕉 流 蕉 里 寛 流 蕉 里

削りにもり坂のみの風
 ちぬきにさるのころさる
 う立て中かんに傳ふもさるのきり
 そ川と火入よおとる 蕉
 花もさるもさるぬきもさるのきり
 漱かーらのちるかさるのきり

里 寛 蕉 流 蕉 里

172

馬寛

雀カウの字や拵めて寝るものあり

てしなぶの岸のありし月

さうぶを思つてまはれぬ秋草

物川ししやうのそく月酒

おれまゝいらぬあつたふも

寝まゝらておの洗足

沓圃

里圃

寛

沓

里

後表上

悔しきころあの一歩のさそひ
遠路もとてまゐらふら
あふさむ旅のあつた氣
あゆりまゝに国方乃客
何をもちてあつた
風よめつあつた
意新し秋の候はよ
旅のさそひ

佐 寛 里 泊 寛 里 佐 寛

照らさる伊勢の幸洲の
世をこえつたわが
借もしたわが
まが静かき
雪のあつた
まがぬ合点
てつた
とのあつた
とつた

佐 寛 里 泊 寛 里 佐 寛

汁のきつものちからが子のちぎれて
 あゝもまをさす川刈てと衣
 にしに寺の栴圖をちぎし
 扇のあざらうおのを掛し
 隣りしてよゝいれいぬ小高
 早下してなよよの粉足
 肌入て秋にちりりさの月
 顔よとちるくも世の戸
 里 佐 寛 里 佐 寛 里 佐

けし盛を寶の母おと向て
 むの付てけしあ羽りなる内
 車のをれい帷子附のそひお
 けて氣味よき枚苗の風
 花のうけをむび立雛子の舞
 あゝ田の土のかくくけら
 里 佐 寛 里 佐 寛

後表二

さきまきいりしちりるる
冬のおまゝのちりるる
大根のそとぬえぬ
上下のちりるる
所切の月見のちりるる
ちりるる

里圃

佐圃

芭蕉

馬寛

佐

里

知思能の誓り此等極りて
はくく此等を楓わやう
廻の極よあまうけたり
月利ては水をよんまうかり
此等を駿河の飛脚極りて
やうここのめをがしぬりの乾
岸のまよふまうこの徳ちまう
伊弉氣つこの綿とりのも
佐 寬 里 佐 寬 里 佐 寬

うき猿を鷲とつれ立浮りる
さゆきうきうきうきうき
某舟の元の申よりはくも
極の傍へ門をきうてたり
百城よちりてせらりもせら
こまをを膳よあまに某
漬おの漬極はくおちり
らあのおつこのまをのつたあ
佐 寬 里 佐 寬 里 佐 寬

後表

石をいづる舞の申の絡線ギスの
 糸をいづる人々ひびきとて 泣
 火燧の火いけて携手ひびき
 一ふゆき〜 唯乃木
 折しを案月の起るまに
 仰に加減入りちるおをさ
 月夜よも〜いかにひびき
 おもひのま〜れりおをさ

里 佐 克 里 佐 克 里 佐

手拂子娘をやりて娘のささ
 んふふのうらをいさらしてはさ
 したのおと踊踏の〜おをさ
 寺のひけ〜ら山原のまをさ
 冬より光〜りけの甲
 一ふゆき〜あ〜る風

里 佐 克 里 佐 克 里 佐

巻二

猿蓑にもれとらわねの松も落し
舟を空よりれと静なり 芭蕉
水かき池の舟りりるありて
篠竹さしは葉をいづる
鶴あうらわやうそまの月
ついでに孔やとれんをうらわ

沓圃

芭蕉

支考

惟然

蕉心

考

魚志まじし一荷てまきさら筋の魚
 身をほほの癖をひきまじり
 舞うまて西川ともせはみ物
 申國ありの杖のまらたを
 朔日の月をさくやう振舞
 一きおひひり失てまらぬら
 きさ年なまきまの比の根根
 らに門あらしむるの月
 然 蕉 考 然 蕉 考 然 蕉

神あり一畑の人のうけおると
 水際まら^由深りわ
 いてまら紀と并まら花の咲か
 岸抜ひとりまらまら水まら
 くら風の又まら北にまら
 わらまら脈をちまら
 板の四保まらまら
 空まらまらまらまら
 然 蕉 考 然 蕉 考 然 蕉

後集三

大せ川なほう二なるさき書の續
 雪くさふ——申のどろろ
 来る程の糸掛を若也家流
 奥の世並をとり居の地
 酒より七有のやらふ月にて
 赤鷄頭をこぼるる 西面
 さうね娘のころかき川を
 藤江のともほろとねこのま

蕉 然 考 蕉 然 考 蕉 然 考 蕉 然 考

もひ鏡をほくくくくくくくくくく
 大こつういの奥のふかやゆら
 来摺もふまふ——してゆきや
 う——めて糸の半を押あふ
 けあさう油をききたのけも
 鴨の油のまこぬけぬま

蕉 然 考 蕉 然 考 蕉 然 考 蕉 然 考

今宵賦

野盤子

支考

今宵は六月十六日の夕暮りよわめわめい月
 東方の朧山よわけて衣裳も薄ぬの秋
 をゆめむとこれと今宵の阿そいそし先り
 尊卑の席をささげしや志はし敵て
 〜〜〜快人そこしよ清くわして野盤子
 ひらぬおもひきらぬしわらうがはく人そこ
 〜〜〜人そ真とそ免むとんあ〜福をね

おいらよ糸のこめいんばもかちん池岸
のさよめいんこいんばのさよめいんば
おいらよ糸のこめいんばもかちん池岸
のさよめいんこいんばのさよめいんば
おいらよ糸のこめいんばもかちん池岸
のさよめいんこいんばのさよめいんば

おいらよ糸のこめいんばもかちん池岸
のさよめいんこいんばのさよめいんば
おいらよ糸のこめいんばもかちん池岸
のさよめいんこいんばのさよめいんば
おいらよ糸のこめいんばもかちん池岸
のさよめいんこいんばのさよめいんば

ろろろろ色人の髪よろうひておちへ次窮
 争て月もかゝるおぼり夜やまて急な
 比を阿婆もたまたまのさへもさへ
 されしま支をさへさのさよほし
 おて時節の比をさへ久世なともおめなり
 志々々湖のあまのやうてさへさへ
 わうれて山くげほさひめおるさへ
 のと背をさのさへさへさへさへ
 らはるさ方の真の事何そあへさへ

ろろろ解てゆめさへさへさへさへさへ
 めめさのまさとたへさへさへさへ

芭蕉

さのわや解てさへさへさへ
 さをさへさへさへさへさへ
 さへさへさへさへさへさへ
 さへさへさへさへさへさへ
 さへさへさへさへさへさへ
 さへさへさへさへさへさへ
 さへさへさへさへさへさへ
 さへさへさへさへさへさへ

猪を猪場の卯へ追みか
 山々々々に名をたててあは
 取桂ちる面桶よそよあ打鎌
 寫てユ又きさうら 照降
 おれつ夏舟お猪ちく猪の書
 持御のうちよ夕日さ
 平畦よ葉を蒔き ねと疎
 秋風ささる戸の左風品
 然 考 翠 蕉 考 然

馬りて旅ひぬる月の影
 危弛てつきしもの名はら
 餅好のこもー孔花あはれて
 西月さのく襟もよこさく
 まら風よ昔話のほもさく
 萩々村へおけらうさ
 喰ふぬ聲の響も口まいて
 何その町を山依よちり
 蕉 考 然 考 翠 蕉 考 然

巻之二

世はさき様お付くらさきと
 廣こつらら神月おき末蕉
 おおき海老よと川矢木の町
 除の日はよ雪り氣を
 春くらと海老とぬ酒のりはぬ
 忌かえのふまは母あつら
 封付—又おきくら月の暮
 そろしありくらと盆の上おれ
 ち 蕉 ち

虫籠つら四糸の角の何所
 ちと海老あつら表 一固
 今の日よ海老をえくらと松の上
 ち中な海老のそんよさゆら
 盆ちくらと海老の籠おちとて
 腰上げつら—と海老の下
 ち 蕉 ち 高

後表

廿五



